

近代造船の先駆者・渡辺蒿蔵（下）

—幕末長州藩における海事志向の影響を踏まえて—

牛見 真博*

Short biography of Kozo WATANABE, a pioneer of the modern shipbuilding industry; the second half : Based on the influence of the maritime intention in the Choshu Domain at the end of Edo period

Masahiro USHIMI

Abstract

Kozo WATANABE was born in Hagi, Choshu Domain (present day, Hagi City, Yamaguchi Prefecture). He attended *Shoka Sonjuku* (a private school run by Shoin YOSHIDA) in 1856 to study under the principal's supervision at the age of 15 years old. He studied naval architecture in the United States and the United Kingdom inspired by the principal (Shoin YOSHIDA) at the end of the Edo period. After returning to Japan, he entered the Ministry of Engineering of the Meiji government and acted as the second dock-master of the Nagasaki shipyard. Furthermore, he made an effort for the construction of Tategami dock which was admired as the most advanced dock in Asia. These great achievements led him to be called the pioneer of the modern shipbuilding industry. I'd like to the explanation until his sunset from studying abroad.

Keywords: Kozo WATANABE (Seizaburo AMANO), Maritime intention, Modern shipbuilding, Nagasaki shipyard

キーワード：渡辺蒿蔵（天野清三郎）、海事志向、近代造船、長崎造船所

1 はじめに

長州萩に生まれた渡辺蒿蔵（天野清三郎、1843-1939）は、15歳で吉田松陰が主宰する松下村塾に入門し、感化を受けた。志士としての活動を経た後は、幕末期に藩の海外留学生としてアメリカ、イギリスに渡り、造船を学んだ。帰国後は工部省に入り、官営長崎造船所第二代所長（後に長崎造船局となり初代局長）を務め、東洋一と称された立神ドックの建設に尽力するなど、我が国における近代造船業の端緒を拓いた人物である。後半部となる本稿では、彼の海外留学に至る経緯から晩年までを追いたい。

2 海外留学に至る経緯

先行研究において天野の留学と当時の藩政との関わりについて説明するものはなく、この辺りの経緯は不明瞭なままである。そこで、留学に至る前段階として藩の動向に目を転じてみたい。攘夷期限となる文久3年（1863）5月10日、攘夷派の松島剛蔵と久坂玄瑞が主導し、下関海峡を通過するアメリカ商船に対して砲撃を加えた。同23日朝にはフランス軍艦キャンシャン号、同25日夜にはオランダ軍艦メデューサ号を砲撃した。この時、天野は久坂率いる光明寺党の一員として行動を共にしている¹⁾。

*一般科目

これらはいずれも庚申丸艦長の松島が、久坂ら光明寺党のメンバーと乗組んでの砲撃であった。松島と江戸航海を経験し、久坂と行動を共にしていた天野もまた、庚申丸に同乗して攘夷行動に加わっていたと考えるのが自然であろう。この後5月27日、久坂は攘夷の状況を幕府と朝廷に報告するため京へ派遣されている。



図1 庚申丸（山口県文書館蔵）

しかしながら、6月1日にはアメリカ軍艦ワイオミング号による報復攻撃を受け、長州藩の所有する庚申丸、壬戌丸、癸亥丸は大破した。さらに5日にはフランス軍が下関に上陸し、前田・壇ノ浦砲台の占拠をはじめ多大な被害を被った。ここに至り、世子毛利定広の命もあり、高杉による奇兵隊が光明寺党を母体として創設された^{注1)}。こうした状況下で、天野（21歳）は光明寺党からの流れや高杉とのつながりもあってか、すでに同月には奇兵隊にいたことが「奇兵隊日記」から確認できる²⁾。翌7月には、高杉により「奇兵隊稽古掛」を拝命しており、その信頼も相当に厚かったことが窺える³⁾。

ただし、その一週間後の7月20日には、「奇兵隊稽古掛」から、「勅使」の護衛の任に替わり⁴⁾、27日には京へ上っている⁵⁾。これには、京と国元とを往来しながら周旋を続ける久坂の支援といった意味もあったであろう。この時、上洛した中から選ばれた天野は、10月には「狙撃隊」の「司令士」（中隊・小隊の指揮官）として銃陣訓練を指導しているが⁶⁾、翌元治元年（1864）2月1日には「差除」されている⁷⁾。その後、2月10日に下関の奇兵隊本陣を訪れているが、その際の「奇兵隊日記」には、「天野

清三郎来候事」、翌日には「山口へ行」と記されている⁸⁾。同日記は隊士が他所から帰陣した場合には「帰陣」と表現するが「来候」とあることから、やはり奇兵隊を離れて別の任を担っていたことが窺える。

同年7月19日に起こる禁門の変（蛤御門の変）前後の天野の動向について、後の回顧によれば、江戸にいた天野は加勢を頼む同志の檄に動かされて、一路東海道を下り京へ向かったが、近江の草津まで来たとき、久坂玄瑞や寺島忠三郎、来島又兵衛など多くの知己、友人の戦死、長州藩敗北の報を受けた。思案した天野は、今京に入り一命を取られるよりは、生きて君国に尽くすことを決め、他藩の藩士として船に乗ることを図り、命からがら長州へ戻ったというものであった⁹⁾。翌8月には、四国連合艦隊による報復攻撃により被害は甚大であった。そして、これにより長州藩は武力での攘夷に見切りをつける大きな転換点となった。

この8月の下関戦争以降の天野の動向は判然としない。12月の高杉晋作による功山寺拳兵にも加わっていた様子は窺えない。下関戦争で長州藩から全ての軍艦が失われたことにより藩の海軍構想が潰えたことも¹⁰⁾、天野の造船に対する思いを駆り立てたのかも知れない。また当時、藩の西洋学の拠点である博習堂で洋書をひもとく者は少なく、20名程度しかいなかった^{注2)}。

師である松陰及び先輩同志の英学や海事志向を目の当たりにする中で、天野もまた海事を強く志向するようになり、この時期を境として、あるいはすでに将来的な洋行も志し、博習堂で学ぶに至ったものと思われる。博習堂はもともと萩明倫館に附置されていたが、元治元年7月17日の山口明倫館開校に伴い、山口に移っている。博習堂は文久元年以降、村田蔵六（大村益次郎）により教育課程、教育内容ともに整えられ、先進的な西洋兵学教育機関に発展していた時期であった¹¹⁾。

文久3年の長州ファイブによるイギリスへの密航留学の実現（5月）をはじめ、翌元治元年の禁門の変（7月）、四国連合艦隊報復攻撃での海軍艦船の喪失（8月）などといった長州藩をめぐる大きな動きの中で、松陰の説く「立志」と「実行」の具体的な

対象を洋学、とりわけ海軍知識の摂取に自身の進路を見定めた末の選択であっただろう。天野自身の洋学や海事志向の高まりは、藩内の海外渡航の動向や、洋学振興の拠点づくりの具体的施策とも時期的に重なり、天野にとっては必然とも言うべく博習堂に身を置き、洋学のテキストを通しての海軍研究を行うことを求めたものと思われる。こうした一連の流れを踏まえれば、天野の博習堂入りは元治元年（1864年）、四国連合艦隊の報復攻撃で藩が艦船を全て失った8月以降であろう。

従来、天野は博習堂で語学を学んだとされてきている。それを当時の博習堂の教育形態に即してみると、天野は博習堂で「原書科」あるいは「訳書科」に籍を置いていたと考えられるが、蘭学ではなく、すでに英学の業本（テキスト）を通して海軍知識を学んでいた^{注3}。具体的には、「兵学」、「海軍」、「海陸兼用砲術」の各学科で構成され、海軍科は、さらに運用術と航海術に分かれ、その中で優秀な諸生に、庚申丸での実習を命じ、造船・運用・航海・艦砲のいずれかを専修するよう系統立てられていた¹²。

慶応元年（1865）4月30日には、三田尻海軍学校が創設され、博習堂は附属の英学・蘭学の語学研究機関に位置づけられることになった。この改組は、海軍修業も英学・蘭学の書籍上からの知識が多いため、両機関が連携を取ることで、より双方の修業に資するとの理由からとされるが¹³、さらには対幕府を視野に入れてのことでもあっただろう。

幕長戦争は僅か一年後に起こっている。天野の回想によれば、慶応元年には山口の大村益次郎に就いて学んでいたが、その大村に「英語を勉強するなら、三田尻に行つて戸田亀之助に就て学ぶがよかろう」¹⁴と勧められたとある。実際、同年7月21日付の伺書には、「右三兵学課塾入込被差除為英学修業海軍学校入込可被仰付哉」¹⁵とあり、藩政上において、「英学修業」のために海軍学校への入所を命じられたことが分かる。三田尻海軍学校は、すでに創設時点から英学が主流であったことが指摘されており¹⁶、英語の原書の教授を「英学抜群」とされた桂右衛門が担当していたことなど¹⁷、大村の勧めもそうした状況を踏まえてのものであったと考えられる。

さらに言えば、海軍学校の創設に伴い、藩の軍事体制の中核を担う「艦隊長」「艦長等」となるべき候補を育成するために、大組の士から成る「干城隊」から入学者の人選をするよう達せられたことも関係していよう^{注4}。すなわち、ここから天野が藩政における人材としてどう捉えられていたかが見えてこよう。先に見た大村の勧めというのは、「英語を勉強する」ためというよりもむしろ、藩の洋式海軍の先駆けであり重鎮であった松島剛蔵（元治元年12月に刑死）の構想を踏襲した海軍学校の創設にあたり、当時の長州藩海軍を率いる戸田亀之助の下で、より深く英学による海軍研究に励めという意味合いであっただろう。そのため海軍学校への移籍も、藩政の一環として大村や戸田による推挙があつてのことと理解するのが妥当と思われる。

当時の海軍学校は、初等（語学・製図・数学など基礎科目）・中等（造艦・航海・艦砲など専門科目）・上等（実地訓練）の三等級に分かれ、それぞれ3年間を修業期限としていた¹⁸。ただし、すでに博習堂で学んでいた天野については必ずしもこの通りではなかったであろう。従来は後の本人の回想に重きが置かれ、博習堂で英語を学んだ後、海軍学校の英語教官になったと理解されてきている¹⁹。しかし、これも文字通りに単に「英語」を教えたと取るよりも、「海事英語」と捉えるのが妥当であろう。すなわち、天野は海軍学校在籍時点で語学だけに専心していたのではなく、来るべき幕府との対決を控えた藩による海軍学校創設の意図からしても、海事専門科目や実地訓練に従事していたはずだからである。

天野は先に見たように、松島剛蔵が率いた丙辰丸による長州藩初の江戸遠洋航海の一員であり、その後は高杉率いる奇兵隊稽古掛、さらには松島や久坂と攘夷活動を共にしてきたことは、藩内では周知の事実だったはずである。高杉においても、奇兵隊など自らの目の届く場所を離れてでも天野の海軍研究への志を理解したのは、同じ松門の後輩で丙辰丸による江戸航海の同志でもあり、亡き松陰からも直接その行く末を託されていたこと、そして攘夷活動に見られるような胆力もある天野の海事志向が、将来の長州藩にとって大きな力になると思わせるだけの

適性を彼が持っていたからと考えられる。

当時、奇しくも大組に属する士分で天野のように海上・陸上の実地経験に通じ、博習堂で語学も修業した経歴を持つ者は珍しい。それだけに天野の存在感は大きかったはずであり、さらに博習堂と三田尻海軍学校との一体化という当時の藩政と関連づけて考えれば、天野が長州藩海軍の幹部候補として大村や戸田の目に映っていたことはごく自然なことに思われ、むしろ教官同様の人事で推挙され、さらなる教学修業にあたらせようとしたというのが実際のところではないだろうか。

翌慶応2年(1866)は幕長戦争を目前に控え、高杉晋作の独断契約を契機として蒸気船丙寅丸(オテナ丸)が新たに海軍に加わり、さらに高杉は5月27日に「海軍御用掛」²⁰⁾、開戦前日の6月6日には「海軍惣督」²¹⁾に任じられている。当時、長州藩が所有していた五隻の艦船は、乙丑丸(木造蒸気船300トン)、丙寅丸(鉄製蒸気船94トン)、癸亥丸(283トン)、丙辰丸(47トン)、庚申丸(不明)で、後の三隻はいずれも砲を備えながらも木造帆船で、アメリカ製の最新艦である旗艦富士山丸(1,000トン)を擁する幕府との海軍力には大きな格差があった。

しかし、開戦前に高杉が前原一誠と「昨夜も御互に申候、従斯は海軍を主とし陸軍客と相成候形勢にて」²²⁾とあるとおり、6月7日の開戦以降、久賀沖での丙寅丸による幕府軍艦への奇襲の成功にはじまり²³⁾、6月17日に始まった小倉口の攻防では丙寅丸・癸亥丸・丙辰丸による田ノ浦での艦砲射撃、乙丑丸・庚申丸による門司浦での艦砲射撃によって長州藩兵の上陸を援護するなど、長州藩海軍は戦勝に大きく貢献した²⁴⁾。

史的に海軍学校としての動向を記してくれているものは見当たらないが、実習艦を含め、当時藩所有の艦船を総動員していることから、高杉率いる海軍の一環として海軍学校も総力を挙げて参画したことは確かであり、天野も大いに働きを見せたはずである。

それとの因果関係は定かでないものの、幕長戦争後、天野は海軍学校在籍僅かにして、同年中には教官に任じられている。その傍証となるのは、少年二

人を入学させたい旨を教官の天野に伝える慶応3年(1867)正月の木戸の手紙である。また、追記に次のようにある。

……どふこふでも只英学修業相成候得は宜敷と申念願之由に御座候間此段御含奉願候山尾庸蔵など之近里に付逐々風を聞而発起候事と被存申候敬白²⁵⁾

「どふこふでも只英学修業相成候得は宜敷と申念願之由」とあり、すでに天野は「英学修業」の強い希望を木戸に告げていたことが窺える。それに対する木戸の返答は、現在イギリスで造船を学んでいる山尾庸三などにも様子を聞いて実現させたいとあり、藩の重鎮であった木戸が後押しするだけの期待を担っていたことが窺え、天野はすでに海外派遣候補として十分目されていたのであろう。

木戸の周旋が大きかったと思われるが、その言葉どおり、天野(25歳)は同年7月22日、同じ松陰門下の飯田吉次郎²⁵⁾と留学の前段階と位置付けられる長崎への兵学修業を命じられている²⁶⁾。イギリス留学を希望していた天野だったが、12月には藩命により飯田はフランスへ、天野は松門晩年の弟子の一人である河北義次郎²⁶⁾とともにアメリカへ渡り、その後、イギリスへ移って造船技術を学んだ。

3 留学時代

慶応3年(1867)12月に発った天野曰く、米国へは堅固な蒸気船で40日程度の行程であったようである²⁷⁾。まだパナマ運河の開通していない時代、アメリカへ渡る際の様子について、後に次のように回顧している。

地峡鉄道を利用して米国に行かうと思つて、駅に行つて、紙に旅行目的を書いて切符の交付を受けると、駅員が箱のやうなものを指して、あれに乗れ乗れと云つたので、指図のまゝに乗ると、その箱が動き出した、これは不思議なものだな!と思ふ間に、早や轟々として進行を始めた。臍の緒切つて始めて鉄道の切符を買つての汽車旅行だった²⁸⁾。

ボストンで3ヶ月ほどが経過した明治元年(1868)4月、天野は河北と連名で藩政府に書簡を送り、当

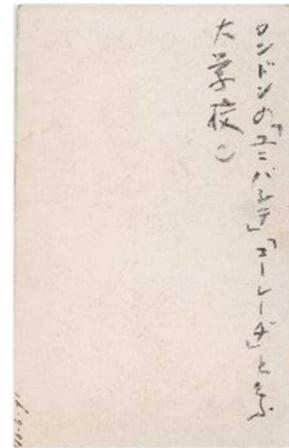
地での金策に困窮する様子と、ロンドンへの留学に変更したい希望を伝えている。

先便にも申上置候如く生等留学に付入費夥敷、……未だ聾啞之身故恐らくは来秋迄位は独立之働は無覚束可有御座に付一卒之事竜動（ロンドン）に転じ可申哉と考え、先達而河瀬氏（河瀬真孝）迄彼之地入費之高、授学之二第（次第）等聞合せ之一封差送候得ども未だ返書を不得候間、……元来生等之志願は欧羅巴行に已然より御座候得ども、米利堅諸価下量にて相済候と申事枉て渡海候処、斯る二第にて何とも諸賢に申訳無御座当惑罷在候間、竜動は当地よりも下量に相済様之事に御座候は、明年よりは彼之地に転じ可申に付、何分之御指揮奉希候。……実に重々御配慮之至りに候得ども、生等入費当年分に対し一人に付未だ三百ドラ（ドル）不足に御座候間、兩人に付残り六百ドラ早々御送り方奉希候²⁹⁾。

すなわち、アメリカは物価が高く出費がかさむが、未だ言語は通じず働くこともできないため、藩から仕送りをしてくれるよう頼んでいる。また、天野は当初からイギリス行きを希望していたが、アメリカの方が生活費は安価という藩政府の理由を挙げ、自らの希望に反する訪地だったことを述べている。すでにロンドンで学ぶ同じ長州出身の河瀬真孝^{注7)}にも書簡を送り、彼の地の様子を尋ねており、それについては返書待ちであるが、実際にはロンドンの方が生活費は安く、来年からはロンドンに移れるよう



図2 留学中に渡辺が入手したロンドン大学写真
(萩市立萩博物館蔵)



ロンドンの「ユニバシテ」「コーレージ」といふ
大学校

図3 写真(図2)裏面に残る渡辺のメモ
(萩市立萩博物館蔵)

に取り計らってほしいとしている。その願いが考慮されたのか、間もなく河瀬真孝の誘いでロンドンに移り、まず家庭教師を雇って勉強した後、明治2年にあたる1869年にロンドン大学ユニバーシティ・カレッジに入っている³⁰⁾。

天野との関わりで着目したいのは、一足先に当大学で工学分野の習得を志した山尾庸三が履修した「土木工学」の科目である。担当は、W. ポール教授（英国学士院会員）で年間約48回の講義の概要（1864-65年）については大学要覧から次のようであったことが分かっている³¹⁾。

- 1 序論
- 2 教育面
 - ・自然科学の工学への応用（数学、統計学、力学、流体静動学、水力学、気学、科学、地学、鉱山学）
 - ・工学素材の性質と特性
 - ・工学過程（製図、測量、水準測定、測定・計算）
- 3 記述面
 - ・工学の実際と業務一般（土壌と鉱石、基礎工事、建設過程、トンネル工事、石・煉瓦・鉄・木による橋造り）
 - ・工学の特定分野（鉄道、道路、内陸水路、河川、河口：港、防波堤、棧橋、ドック・倉庫：灯台：排水設備、灌漑、土地の埋め立て、水道設備：ガス設備など）
- 4 機械工学

・鉄の構造、蒸気機関、機械装置、鉄船の造船、
船舶工学、蒸気船の航行

5 工場視察

6 測量水準測定

内容は非常に多岐にわたるが、4にあるように、造船等の機械工学分野についても、この「土木工学」の科目で扱われていたことが分かる。造船業は工業技術が集約化したものと言われるように、山尾は造船を通して工業分野全般について習得したいという思いがあったものと思われる。山尾は翌1866年秋にマセソンの斡旋でグラスゴーへ移り、ネイピア造船所の職工になった³²⁾。1860～70年代、グラスゴーはイギリス第二の都市として、「大英帝国の工場」とも呼ばれ、鉄道や造船業で栄えていた。ネイピア造船所があったクライド川沿いだけでも30～40の造船所があり、なかでもネイピア造船所は、エンジンから船体まで全てを造る先端の一大造船所だった。

また、ヨーロッパや中国からも徒弟工を受け入れ、働きながら造船について学べる造船の学校といった観があり、1860年代には、約1,500～2,000人がネイピア造船所で働き、そのうち2割はこうした徒弟工だったようである³³⁾。そうした当時の状況を考えるとき、ネイピア造船所という選択は日本人の山尾にとっても自然なことだったように思われるし、あるいはロンドン大学経由で適切な修業先として周旋があったのかも知れない。



図4 長州ファイブ(右下: 山尾)(萩市立萩博物館蔵)

主に造船を通して工業技術全般を学んだ山尾は、その後、明治元年(1868)に帰国し、明治政府に出仕。同3年(1871)の工部省設立に尽力し、工学寮(後の工部大学校:東京大学工学部の前身)を発足させ、工業分野の人材育成に尽力することになる。後に、帰国した天野の工部省入省を勧めたのも山尾であった。

天野もまたロンドン大学ユニバーシティ・カレッジにおける一年間の在籍([Amano,S] 1869-70)が確認されているが³⁴⁾、残念ながら天野の履修科目等の資料は明らかではない。ただ、天野は後に造船のみならず、「ドック」や「灯台」の設置に力を発揮していることから、恐らく山尾と同じ「土木工学」の科目を履修し学んだことが推察される。また、ユニバーシティ・カレッジ在学後は、グラスゴーの造船所で職工を務めたとされており、山尾が大学や造船所等との縁故を生かして、天野の修業先を周旋したことは想像に難くない。天野は、恐らくはネイピア造船所といった山尾と同様の環境に身を置いて修業に励んだと考えられ、この間に広く造船等の技術習得に努めたことは確かなようである³⁵⁾。

明治5年(1872)10月には、欧米各国の視察と調査を目的とした岩倉遣欧使節団の全権副使として訪英した木戸孝允との再会を果たした。エジンバラには、かつて日本で公使を務めたパークスとも接見の機会があり、彼が「此処で鉄船の製造を修業しても、日本には鉄船がないから、寧ろ木造船をやっている亜米利加に行つて修業してはどうか」³⁵⁾と助言したのを契機に、アメリカ行きを希望するようになる。

明治6年(1873)1月15日、木戸孝允に宛てた次の書簡からは、明治5年末頃には、それまでの造船所を辞めて、アメリカ行きの準備に取り掛かっていたことが分かる。

其節御高諭之如く、尚兼て申上置候米行一条に付、昨歳末切にて是まで居合せ候造船局を去り当府へ参り、間なく渡海之覚悟に罷在候間…³⁶⁾同月、木戸は次のように返答している。

過日御一書御投与拜見仕候弥御壯剛珍重々々御米行一条内実云々弟之存意を以寺島へも相談置候処同人もい細了承いたし居候間御目的

相定候は、御渡米可然と奉存候乍去御到着之地は得と御詮議之上御発被成候方必上手段と奉存候左候而可成丈精々速に御調らへ御帰朝之処万禱仕候草々頓首³⁷⁾

この書簡のとおり希望が叶いボストン造船所に移った天野だったが、同年12月、従前に各藩から留学し、明治政府発足後もその延長線上で海外にいた当時の留学生たちは、発布後間もない「学制」に関わる留学制度の変更に伴い、すべて日本に召還されることになった^{注9)}。

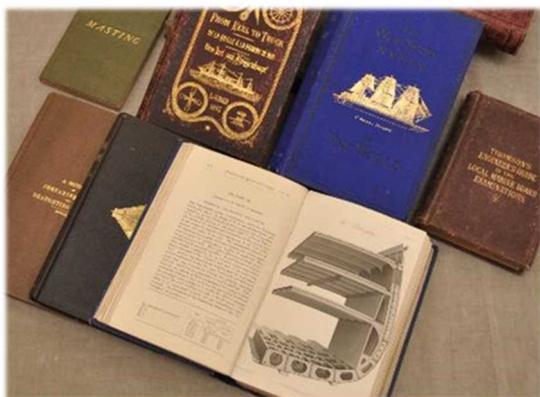


図5 渡辺が留学中に収集した造船関係書
(萩市立萩博物館蔵)

4 長崎造船所時代

渡辺の帰国は、明治6年末～7年初頭にあたる。帰国後は、山尾庸三の勧めで工部省に入省する。工部省としては近代国家を目指す重工業の拠点の一つである長崎造船所への現場責任者に、海外で先端の知識と技術を学んだ技術者を強く欲したのは言うまでもないことであった。渡辺は、明治7年(1874)5月27日に第二代所長として赴任した^{注10)}。これは、立神ドックの建設工事が始まる10日前であり、我が国最初の造船技師が責任者として配置され、今後の発展が託されることになった。同年、渡辺が工部省に行った提案に対して、山尾庸三は書簡で次のように返信している。

此地（工部省）ニ造船之事者相分り候者も無之事に付何も御見込之通り御取計被下度丸々御依頼仕候猶是後も右様御承知奉願上候³⁸⁾

本省には造船について分かる者はないため、渡辺の判断に今後も全て任せるとの回答であり手放しと

でも言うべき信任の厚さであったことが分かる。また明治政府の重鎮となった木戸孝允からの信頼も厚く、船の精度について意見を求められるなど^{注11)}、斯界をリードする人材と目されていたことは疑う余地がない。

また、当初の計画より約2年遅延したものの、明治12年(1879)5月21日、創業以来の懸案だった我が国最大にして、当時東洋一とも称された立神第一ドック（全長140m、幅27,17m、内部31m、深さ10,4m）が完成した。これにより、内航船のみならず外航船の入渠や新造船事業は一層進むことになった。



図6 立神第一ドックとロシア軍艦
(三菱重工業長崎造船所蔵) 明治13年

さらに同9年(1876)10月の起工から、じつに6年5ヶ月をかけて、16年(1883)2月には当時我が国の造船史上最大となる五番造船（木造汽船小菅丸：1496ト）が竣工した^{注12)}。これらの事業は、我が国の近代造船業の端緒を拓いた象徴とも言えるものである。

明治16年(1883)9月、工部省直轄の長崎造船局になると渡辺はそのまま局長に就いた。しかしながら、現場の活況は^{注13)}、皮肉なことに必ずしも企業体としての経営の安定とは相容れなかった。時に明治15年以降、いわゆる松方財政のデフレ政策の余波を受けた不況による受注の途絶とともに、それまで必要以上の支出もやむなしとしてきた設備投資や原

賃管理体制などの内的要因も加わって一転経営困難に陥り、長崎造船局は結局払下げの方向で検討されるに至った。工部省による民間への貸与の発案を承け、明治17(1884)年7月には岩崎弥太郎による「郵便汽船三菱会社」に貸与し、その経営を委ねることになった^{注14)}。



図7 建造中の小菅丸
(三菱重工業長崎造船所蔵) 明治14年

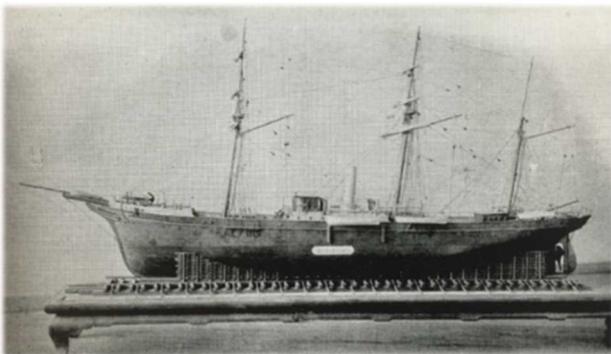


図8 小菅丸〈模型〉
(『船舶百年史前編』所収, 有明書房, 1957年)

5 おわりに

明治17年7月、長崎造船局の三菱貸与後、渡辺は工部省の技師として出仕した。同じ松門の品川弥二郎の周旋もあり、逓信省の技師として横浜の灯台局兼務を命じられ、横浜港外に二基の大灯台を設置している。その後、明治19年(1886)には逓信省管船局所管の大阪及び神戸司検所長として船舶検査や航海免許発行等に従事した³⁹⁾。港湾・船舶に関わる重要な任には違いないが、自他ともに認める造船技師であったはずの渡辺にとっては、必ずしもその意に沿うものではなかったかも知れない。その後、明治24年(1891)に49歳で萩へ帰郷^{注15)}。同志の遺品や

松下村塾の保存などにも尽力しながら^{注16)}、松陰門下生最後の生き残りとして昭和14年(1939)まで生き、97歳の長寿を全うした。

以上、関係史料に基づき渡辺蒿蔵について追ってきたが、彼の人生は師である松陰、新政府のリーダーとなった木戸、久坂や高杉をはじめとする松門の先輩同志、松島や大村といった長州藩洋学の重鎮、ロンドン留学の先輩山尾といった人とのつながりに後押しされながら、松陰が常に説いていたという「立志」と「実行」が加わり、いわば歩むべくして歩んだ人生であったように思われる。同志の遺品や松下村塾の保存に尽力したこともまた、そうした周囲に対する恩義を忘れない彼の人物を物語っているようにも思われる。

明治政府における重工業政策の重要な一端を担った官営期の長崎造船所にとって、天の配剤とも言うべき渡辺蒿蔵の尽力によって、日本の近代造船業の土台が築かれた功績は大きい。そして、その背景には幕末期長州藩における海事志向の強い伝播があったともみることができよう。

参考文献

- 1) 武田勘治『久坂玄瑞』, 321頁, マツノ書店復刻版, 1998年、青山忠正『高杉晋作と奇兵隊』, 133頁, 吉川弘文館, 2007年。
- 2) 『定本奇兵隊日記』上, 11-30頁, マツノ書店, 1998年。
- 3) 「異賊防禦御手当沙汰控」(『山口県史』史料編・幕末維新 6, 52頁)。
- 4) 前掲『定本奇兵隊日記』, 47頁。
- 5) 同上。
- 6) 前掲「異賊防禦御手当沙汰控」(『山口県史』史料編・幕末維新 6, 67頁)。
- 7) 同上, 106頁。
- 8) 同上, 226頁。
- 9) 金子久一編『松陰門下の最後の生存者渡辺翁を語る: 昭和十五年三月七日渡辺翁追憶座談会速記録』, 79-80頁, 萩響海館, 1940年(以下、『渡辺翁』)。
- 10) 『修訂防長回天史』第三編下, 487頁, マツノ書店, 1991年。
- 11) 小川亜弥子『幕末期長州藩洋学史の研究』, 103-116頁,

思文閣出版,1998年。

- 12) 小川前掲書,108-112頁。
- 13) 同上,154頁。
- 14) 『渡辺翁』,84頁。
- 15) 「文武御興隆明倫館兵学校其外伺書」参（山口県文書館蔵）。
- 16) 『高杉晋作史料』第一卷,284頁,マツノ書店,2002年。
- 17) 小川前掲書,156頁。
- 18) 小川前掲書,155-157頁。
- 19) 『渡辺翁』,84頁。
- 20) 前掲『高杉晋作史料』第一卷,362頁。
- 21) 同上,364頁。
- 22) 同上,365頁。
- 23) 三宅紹宣「幕長戦争における高杉晋作の幕府軍艦奇襲の背景」(『山口県地方史研究』第110号,2013年)。
- 24) 前掲『修訂防長回天史』第五編中,490-495頁。
- 25) 「慶応3年正月6日天野清三郎宛書簡」(『木戸孝允文書』二,258-259頁,東京大学出版会,2003年)。
- 26) 前掲『修訂防長回天史』第五編下,324頁。
- 27) 中西洋『日本近代化の基礎過程—長崎造船所とその労使関係—』中,406頁,東京大学出版会,1983年。
- 28) 『渡辺翁』,88頁。
- 29) 『木戸孝允関係文書』1（東京大学出版会,2005年）,142-143頁。
- 30) 『渡辺翁』,89頁。
- 31) 藤井泰「山尾庸三とユニバーシティ・カレッジ」(『英学史研究』22,1989年)。
- 32) 北政巳『国際日本を拓いた人々』,34-35頁,同文館,1984年。
- 33) 宮地ゆう『密航留学生「長州ファイブ」を追って』,50-52頁,「萩ものがたり」6,2005年。
- 34) 井上琢智「幕末・明治・大正期イギリス日本人留学生資料(1)」(『経済学論究』56(4),2003年)。
- 35) 『渡辺翁』,90頁。
- 36) 前掲『木戸孝允関係文書』1,145頁。
- 37) 「明治6年正月24日天野清三郎宛書簡」(前掲『木戸孝允文書』五,2-3頁)。
- 38) 中西前掲書,408頁。
- 39) 『渡辺翁』,92-93頁。

注記

- 注1) 奇兵隊の創設事情については、青山前掲書参照(139-143頁)。
- 注2) 同上,484頁。文久2年3月時点で博習堂の居寮生は20名程度とあるが、この段階ではまだ天野の名は見えない。
- 注3) 妻木忠太『木戸松菊公逸事』(マツノ書店復刻版,2015年)に、「渡辺蒿蔵氏の談」(大正7年10月23日)として、「私は坪井航三(後ち海軍中将)等が、蘭学を修めてゐるのに、独り英語の字書を引いて、海軍のことを研究した」(543頁)と見える。
- 注4) 「海軍学校諸控」(山口県文書館蔵)。川口雅昭「三田尻海軍学校の教育」(『広島大学教育学部紀要第1部』27,1978年)は、海軍学校の設立に干城隊が関係していることを早くから指摘している。
- 注5) 海原徹『松下村塾の明治維新』,249-255頁,ミネルヴァ書房,1999年。同書に拠れば、松陰が江戸に送られる際に飯田宛に詩を贈っていることを挙げ、「群童中に際立ったその才能に期することがあった」(250頁)、また正確な時期は分からないとしながらも、文久3年秋以降の大村益次郎による山口兵学寮普門寺塾、あるいは三兵塾や三兵学科塾における会読の成績では、「飯田が一番よく出来る生徒であり、海外留学生に選ばれる素地は十分にあった」(251頁)とある。
- 注6) 海原前掲書『松下村塾の明治維新』,178-184頁。15歳で松門に入り、その後干城隊、御楯隊に参加し、軍監の地位にあった。慶応2年には兵学修業のため長崎へ派遣されている。
- 注7) 河瀬真孝は、功山寺拳兵などで高杉晋作と行動を共にし、遊撃隊総督を務め、第二次幕長戦争でも活躍した。奇兵隊以来のつながりもあり、天野とも親しい間柄であったと思われる。元々イギリス行きを希望していた天野がアメリカに発った慶応3年、同じく木戸の周旋により河瀬が、毛利親直、福原芳山とともにイギリスへ留学しており、限りある財政の中で藩として留学生の訪地を分散させようとしていた意図も窺える。
- 注8) 『渡辺翁』に、「エジンバラは蘇格蘭の古都で山岳秀麗を以て名高い所ではありますが、翁は此処では造船所の一職工となつて、機械油で汚れた労働服を着て、汗を流してハンマーを振り、勤労を通じての実地体験苦を嘗め

て、実学実行の村塾教育の真髓に触れられました」(90頁)とあり、文脈上エジンバラの造船所と取れるが実際にはグラスゴーであろう。

注9)明治6年3月、「学制」において文部省は海外留学生に関する規則を制定し、官選と私願とに分けそれらはすべて文部省の管轄にはいるものとした。当時、官費生250人、私費生123人計373人の留学生があったとされるが(『文部省第一年報』)、これらの多くは天野も含め、従前の各藩からの派遣であり、新規の施行に伴い、同年12月にはすべての海外留学生を帰国させるに至った(『学制百年史』,230-231頁,文部省,1972年)。

注10)中西前掲書(408頁)に拠れば、明治7年5月に長崎造船所長として赴任した「製作助」(官員6等)を皮切りに、10年1月「少書記官」(同)、12年4月「少技長」(官員から「技術」6等への格付け替え)、13年12月「権大技長」(5等)、16年9月「長崎造船局長」となり、17年7月の三菱貸与時までその職を務めた。

注11)「明治8年1月1日渡辺蒿蔵宛書簡」(前掲『木戸孝允関係文書』6,1-2頁)は、木戸が渡辺に満珠丸なる蒸気船の精度の検分を請う内容であり、山尾庸三に相談してもこの件は渡辺に聞くようにあったと見える。

注12)大正14年に刊行された『明治工業史造船篇』(『明治後期産業発達史資料』第223巻所収,龍溪書舎,1994年,復刻版)によれば、「明治三年より十七年に至る十四年間に於いて、内地新造の登簿木船は約八百九隻あり。汽船はその三分の一を占むれど、之を噸数にて表示すれば、総噸数六万六千余噸に対し僅かに一万六千余噸、即ち四分の一を占むるに過ぎざりき。わが国は大木船を建造すべき良材に乏しきのみならず、欧州諸国に於いてはその当時木船既に衰微して鉄船の時代なりければ、これ等の内地新造木船は皆五百噸を超えざる小形のものにして、何等特に観るべきものなかりき。此の間に在りて長崎工作分局が数年を費して建造し、十六年三月進水したる木造汽船「小菅」丸は、未曾有の大船にして、その構造設備の完全なること、本邦建立の木船中最も顕著なるものなり」(165頁)と評価されている。

注13)『三菱長崎造船所史』第1(三菱造船株式会社長崎造船所職工課編,昭和3年)に拠れば、明治14年7月から翌15年6月の間について、「本期は海運及鉱業の旺盛に随ひ船舶並に機械の製修とも其数を増加し、随つて営

業収入も当局創業以来未曾有の額に上れり、立神修船場に於ては内国船十二隻、外国船十二隻、合計二十四隻、噸数総計三萬一千八百九十八噸六〇なり」(32頁)とある。

注14)この辺りの経緯は、中西前掲書「第3章 工部省長崎造船所の盛衰:1871~84年」の「第4節 官営工業の終結」(616-654頁)に詳しい。

注15)例えば、Wikipediaにおける「渡辺蒿蔵」の記述では、49歳に退職後、日本郵船社長を務めたとあるが、『日本郵船株式会社五十年史』(1935年)、『日本郵船株式会社百年史』(1988年)、『日本郵船百年史資料』(1988年)の歴代役員の方に渡辺蒿蔵の名前は確認できず、そうした事実はなかったことを指摘できる。

注16)渡辺の村塾保存会への参加から後の松陰神社創建までの経緯については、『渡辺翁』(98-106頁)における後人による座談会の内容から窺える。なお、本稿の図4に使用した長州ファイブの写真も渡辺蒿蔵により保存されていたものである。

付記

本稿(上)・(下)は、平成29年度山口県の「明治150年記念後世に伝えたい山口県ゆかりの人物等研究支援事業」による成果の一端である。山口県総合企画部政策企画課をはじめ、専門的見地からご助言いただいた東京海洋大学の國枝佳明教授、同事業でお世話になった関係各所の皆様に改めて感謝申し上げます。